

がんロコモ

質問

70歳の女性です。悪性腫瘍を手術で切除し、現在は化学療法を受けています。がんになる前から膝の痛みが強く、歩くのがつらくなってきました。がんの治療中ですが、膝の手術は難しいのでしょうか。



西庄 俊彦

徳島大大学院医歯薬
学研究所 運動機能
外科学分野准教授

回答

質問者の状態は「がんロコモ」

の可能性があります。骨や関節、筋肉などが衰えて歩く、立つといった動作が難しくなることをロコモティブシンドローム（ロコモ）と言います。その中でも、がんそのものや、がんの治療の影響で運動機能が低下した場合ががんロコモです。

がんロコモは、起きる原因によって三つのタイプに分類されます。

タイプ1はがんによる運動器の障害です。悪性腫瘍が骨や筋肉などにできる場合（原発性、肉腫）や、他の場所から転移してくる際（転移性）に起

闘病・治療で運動機能低下



がんロコモの原因

① がんそのもの

- 転移性骨腫瘍（骨転移）
- 転移性軟部腫瘍
- 血液がん
- 原発性骨・軟部腫瘍

② がん治療の影響

- 薬物治療や手術による安静
- 抗がん剤の副作用
- 放射線治療の影響

③ がんと併存する運動器疾患の進行

- がんの治療が優先されるために、もともとある運動器疾患の治療が後回しになって悪化

原因に応じて対処

タイプ1はがんによる運動器の障害です。悪性腫瘍が骨や筋肉などにできる場合（原発性、肉腫）や、他の場所から転移してくる際（転移性）に起こります。原発性の場合、運動機能がある程度犠牲にしてがんの根治を目指すことが少なくありません。転移性では、がんを制御しながら運動機能とのバランスを考えた治療を行います。

タイプ2はがん治療による運動器の障害です。抗がん剤の副作用による手足のしびれや、放射線治療後に骨がもろくなったり折れる脆弱性骨折などがあります。

タイプ3はがんと併存する運動器疾患の進行です。加齢に伴う関節や脊椎の疾患が、がん治療を優先されるために、そのままになってしまつ場合

質問者の状態はタイプ3の可能性が高いと考えられます。ただし、骨転移（タイプ1）の可能性を否定するために、画像検査をして原因を確認することが重要です。加齢などによる関節疾患であれば、人工関節置換術で痛みが軽くなり、歩きやすくなる可能性があります。

がんの治療中は生命に直接関わらない病気に対し、体への負担が大きい治療をためらう場合も少なくありません。一方で、近年はがんの治療方法が進歩して長期生存できる人も増えていきます。強い痛みが続く、手術によって生活の質の改善が期待できる場合には、主治医と十分に話し合った上で、自身にとって最適な治療を選択することが大切です。

がん何でもクイズ

胃がんを検診で発見した場合、検診以外で発見した場合と比べ、5年後の生存率は何%高いでしょうか。

①10% ②20% ③30%

行こうよ！がん検診

がんに関する質問は
徳島がん対策センター
電話 088 (634) 6442
(平日午前
8時半から
午後5時まで)
へ。

